

田島明子（編著）

「存在を肯定する」作業療法へのまなざし なぜ「作業は人を元気にする!」のか

友 利 幸之介

（神奈川県立保健福祉大学大学院，作業療法士）



2014 年（平成 26 年），日本中の女の子たちが「ありのままの自分」について熱狂しているころ，本書は出版された。タイトルはまさに時流そのものであるが，作業療世界でいえば時代を少し先取りしている。いや，だいぶ先取りした挑戦的な本である。

本書は，田島氏ファン（私も含む）が期待した重厚な単著とは異なり，6 名による分担執筆である。初めて手にしたときは少し裏切られた感もあったが，そこは田島氏らしい人選で，1 人は当事者研究で知られる小児科医，1 人は気鋭の社会学者，そして残る 3 名が特殊な経験や視点をおもちの OT と PT で構成されていた。この超個性的な著者が，「存在を肯定する」ことについて，それぞれの立場からありのままに論じ，編者である田島氏が「作業療法のまなざし」として，それらをうまくまとめあげている。

本書では，現在の作業療法の目的として世界的に注目されている「作業ができること（enable）」の，影の部分である，「存在（being）のぐらつき」に焦点を当てている。また，作業ができる-できない，といった現在の思考の基本軸から，新たな思考の方向性を模索してい

る。少なくとも，「作業ができること」に興味がある方や，「作業ができること」だけが作業療法じゃないだろうと思っている方には，きっと何らかの示唆を与えてくれるだろう。

私も本書でいろいろな示唆を得ることができたが，特に 1 章の熊谷晋一郎氏の論考は興味深かった。熊谷氏自身が脳性麻痺であり，当事者研究として，自身の体との対話，依存，自己決定等について論じていた。「作業ができること」に関係なく，多くの療法士に知ってほしい当事者の視点である。また，4 章の田中順子氏も，ライフワークであるピアノを弾くという作業を通して見えてきた「作業の可能性に潜む罠」，「ディオニュソスの作業療法」での論考では，私も凝り固まっていた作業療法思考をストレッチしてもらった。

ただ正直なところ，本書には私も理解することが難しい箇所がいくつかあり，本書の「行間」や「真意」を読み取れるか否かは，読者の日ごろの経験値や感受性に左右されるかもしれない。私なりの本書の「攻略法」は，多少難解な箇所があっても，そこで何度も読み返すよりは，最後まで読みきるこ

とだ。最後まで読み進めた後，多少わからなくても，そのときに自分が理解できる範囲でいいのだらうと感じた。それがまさに本書で伝えたい，自分という存在を肯定することではないだろうか。

次に，読む順番である。まず，田島氏が執筆した序章と 6 章から先に読んでみるのはどうだろうか。特に 6 章はすべての章を田島氏が要約しているため，序章の次に 6 章を読むことをお勧めする。そして，OT である港 美雪氏（3 章），田中氏（4 章）の章を読み，最後に熊谷氏（1 章），立岩真也氏（2 章），玉地雅浩氏（5 章）に入る。もちろん章の並びにも田島氏なりのこだわりがあると思うが，個人的には，この順番がスムーズに読み進められるのではないかと感じた。

田島氏の著書は，前著『障害受容再考』のように，噛めば噛むほど味わい深くなる。これから，私も人生経験を積み重ねていく中で，本書とまた新たな出会いがあるだろうと期待している。

〔 A5 判 162 頁 2,800 円 + 税 〕
三輪書店 刊
☎ 03-6801-8537